夢のあとさき

清久 志信

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢のあとさき

【Ｎコード】

Ｎ１３２３ＢＡ

【作者名】

清久　志信

【あらすじ】

舞台女優だったサクヤは、千秋楽の終幕後、舞台の奈落へと転落してしまう。

目が覚めた時には、何故か屋外。しかも緑豊かな自然の中だった。

その後、人買いに捕まりそうなところを、偶然通りかかった騎士に助けられるが――。

「聖女だろうが悪女だろうが、何だって演じてやろうじゃない」

迷いながらも前に進もうとする男前女優の　異世界トリップ恋愛活劇！

（この作品は、自サイトにも掲載しております）

Scene. 0　夢の終わり　―Awakening―

これは、何という名の悪夢なのだろうか――。

崩れ落ちる城壁。あちらこちらから上がる火の手。剣戟の音は、近いのに遠い。

腕の中にある温もりは少しずつ、けれど確実に薄れていっていた。何度名を呼んでも帰る言葉はなく、ただ優しい眼差しだけが私に向けられている。

「……嘘つきっ」

穏やかなヘイゼルの瞳に罵倒を投げつけても、失われていく熱はとどまりもしなかった。真っ白だった互いの着衣が、それに比例して赤黒く染まっていく。

血の気の失せた唇が、謝罪の言葉の形にわずかに動いた。それに応えるように、私は何度も首を振る。

謝られたくなんかなかった。謝らなくていいから、ただ……。

ただ、いつもと同じように、ずっと一緒に笑っていられればいいだけ。

私の望みなんて、そんな小さなものでしかなかったのに。

――ああ、私は『この人』を失うんだ。

望みもしない実感が、胸を貫く。

――今度こそ守ると誓ったのに。

為す術もなく、ただ己の無力さを呪うことしかできない。

彼の瞳がゆっくりと閉じ、全身から力が抜け落ちた。それでも微かに残る体温が、余計に悔しさを募らせる。

声の限りに叫んだ。
声にならない想いを込めて。
――お願いだから、いかないで……。

「……クヤ、サクヤ！」
慣れ親しんだ声に名を呼ばれ、ゆるゆると意識が覚醒した。光とともに視界に浮かび上がったのは、見覚えのない白い天井と薄い水色をしたカーテン。
そして、柔らかな茶色の髪を持った、心配顔の青年。
すいと何かが頬を撫でるのを不思議に思いつつ、言葉を発しようとして失敗した。
上手く声が出ない。まるで話し方を忘れてしまったみたいだった。
「サクヤ？」
「……ト、ウヤ？」
ようやく絞り出せたのは、自分でも驚くほど掠れた声だった。透明で綺麗だと褒められたことがあるのが、嘘のようにざらついた声だ。
そんな私を心配そうに覗き込んでいるのは、誰よりも私に近い存在――双子の兄の藤夜だった。
身を起こそうとすると、思いの外力が入らず、崩れるように傾いだ身体を藤夜が慌てて支えてくれた。
「バカ、無理すんなっ」
優しく叱る藤夜の声が、ひどく懐かしく感じる。こんな風に叱られるのはいつぶりだろうと思うと、少し切なくなった。
藤夜は私の寝ているベッドを起こし、楽な姿勢で話をできるようにしてくれる。それが終わると、ベッド脇に置いてあった椅子に腰かけ、確認するような問い掛けを寄越した。

「サクヤ、おまえ自分がどうなったのかわかってるか？」
「どう、なったって……」
記憶を、藤夜に話せるところまで辿っていく。
そして思い出したのは、千秋楽の日のことだった。
「楽日に、奈落に落ちた？」
「そうだ。そのまま二週間も意識が戻らないまま、眠り続けてたんだぞ？」
「え？　二、週間……？」
その時間の経過を聞いて、信じられなかった。そんなはずはないという思いが、頭の中を駆け巡っている。
「……夢でも、見てたのか？」
呆然としている私を、藤夜はひどく気遣わしげに見つめていた。
それに対して、私は首を傾げる。
藤夜は、どうしてそんなことを訊くのだろうか？
「夢……」
夢なら、多分見ていた。
けれど、あれは本当に夢だったのだろうか？
こんなにも――。
「鏡吾さんの、夢か？」
「キョウゴ？」
一瞬、誰のことを言われているのかがわからなくて戸惑う。が、すぐに思い至って、更なる痛みに苛まれた。
「サクヤ？」
「そっか。ここは、鏡吾のいない世界だ」
鏡吾は私にとって、この世界で一番大切だった人。
私の全てを理解してくれた人。
そして、私の『全て』だった人。

想うだけで、胸が苦しくなる。
私は、自らの目の前で、鏡吾を失った。

「サクヤ」
そっと藤夜が私の背に腕を回し、優しく抱き締めてくれた。いたわるように髪を撫でる手が、つらい記憶の中の人と重なる。
「バカサクヤ。こういう時は声殺して泣くもんじゃないんだよ」
藤夜に言われて、初めて自分が泣いていることに気付いた。
そして、何もかもを理解した瞬間、それまでとどめていた想いが堰を切って溢れ出す。
嗚咽は、やがて嘆きの叫びへと変わった。
（嘘つき、嘘つき、嘘つき……！）
胸中で詰り続けても、もうその言葉は届かない。
ここにはいない鏡吾には。
そして、どこにもいない、『あの人』にも――。
祈りなんて、何一つ聞き届けられてはくれなかった。

Scene. 1　夢の始まり　―　Another World　―［1］

ひときわ明るいスポットライトの下、純白の衣装を纏った歌姫が一人、清らかに澄んだ歌声を響かせている。その最後の旋律が優しく拡がり、周りを取り巻く闇に溶け込むように消えてゆく。

やがて、その消えゆくメロディーに、囁くようなピアノの調べが重なった。それと同時に、ゆるやかな闇の侵食が始まる。光が失われていくに従って、ピアノの音色が大きくなり、完全な闇になった後、今度はフェイドアウトしていった。

しばしの沈黙の後、割れんばかりの喝采と拍手が上がった。それを待っていたかのように、舞台全体を照らし出す光。拍手は更に大きくなった。

舞台の上手と下手から、次々に笑みを湛えた役者たちが姿を現し、整列して深々と頭を下げる。ますます激しくなる拍手が、舞台上の彼ら、彼女らを包み込む。

そして、鳴り止まぬ拍手の中、千秋楽の舞台は終幕を迎えた。

「ちょっと、スモーク止めてー！　これじゃバラシできないじゃない！」

「あー、今止めましたー！」

舞台袖に向かって叫ぶ舞台監督の声に、誰かが応えるのをどこか遠いことのように聞いていた。

私はただ、いつも舞台が終わったときに感じる達成感だとか解放感とは違う、奇妙な虚脱感の中にいた。

初めての大役を果たし終わったからじゃない。そうではなく、私は『約束』を守り通すことができたから。

だから、もう――。

そう思った瞬間、足元にあるはずの床がなくなった。
「え？」
落ちている、と気付いたのは、数秒後。
悲鳴を上げる暇すらなく、ただ私は重力に従うままだった。
長いのか短いのかわからない時間があったのは確かだ。突如、目の前が真っ白になった。
（ああ、私、死ぬのかな）
自らの危機的状況であるにもかかわらず、妙に冷静な自分がいた。ぼんやりとした思考は浮かぶが、対処する気がひとつも起きない。
（それもいいか。鏡吾のいないこの世界になんて、生きてたって意味がない）
投げやりな思いに満たされた私は、訪れるはずの痛みを待たずに意識を手放した。

チャプン、と柔らかな水音が聴覚を刺激する。
流れているというよりも、打ち寄せているような水の音。
また、チャプンと。
（……水？）
涌き上がる疑問とともに、意識も徐々に浮上した。
水など近くにあるはずがない。私は舞台上にいたのだから。
不思議に思いながら重い目蓋を開けると、視界に飛び込んできたのは、鮮やかな新緑とその隙間から零れる眩しい太陽の光。
一瞬、思考がフリーズ状態に陥った。
「……は？」
しばらく呆けたようにそれらを眺めた後、かろうじて出てきた言葉はそれだけだ。
がばっと勢いよく起き上がり、辺りを見回す。どこをどう見ても、そこは緑豊かな森でしかない。

けれど、その瞳に映った風景を、すぐには信じられなかった。
「私、舞台の上にいたよね！？」
誰にともなく確認をとる。けれど、当然と言っていいのか、答えてくれる人はいない。
けれど私は、間違いなく舞台上にいた。カーテンコールを終え、バラシが始まっていて、衣装のままでは仕事できないと思って楽屋に戻ろうとして――。
（落ちたんだ。『奈落』に……）
あの時、どうしてかはわからないけれど、奈落の入り口が開いていた。きっと、誰かが幕やバトンのスイッチと間違えて奈落の開閉ボタンを押してしまったのだろう。
エンディングでスモークが焚かれていたから足元が一切見えなくて、更に言うとかなりぼんやりとしていた所為もあって、私は気付かずに落ちてしまったのだ。
そこまで考え至って、今度は思い出したように自分の身体を確かめた。
手、足、背中、頭……。どこをみても、異常はない。それなりの高さから落ちたはずなのに、掠り傷一つ負っていない。打ちつけたような痛みもなければ、青痣や腫れもなかった。
「……どういうこと？」
普通なら、最低でも打ち身くらいはあるはずなのに。
そして、何より不可解なのは、
「それに、ここ、どこよ」
見渡す限りの大自然。樹々には新緑美しい若葉が茂り、その枝には軽やかな声でさえずる小鳥たちが遊ぶ。すぐ側には、信じられないくらい透き通った水を湛えている湖があり、さざ波がきらきらと乱反射していた。先ほど聞いた水音は、この湖のものだったのだろう。
まるでお伽話にでも出てきそうで、私の住んでいたコンクリートに囲まれている街とは大違いだ。

「まさか、ここが天国だとか？」
そう思えば、納得できるような気がする。
これほど美しい景色があるのもそうだし、死んでしまったならば身体に異常がなくてもおかしくないから。
「でも、足あるしなー」
『幽霊』に足がないなんて、誰が決めたのかもわからないようなことを律儀に信じてみたりする。
もちろんそれだけでなく、意識もはっきりしているし、身体に感じる感覚が今までに生活してきたものと何の違いもないのだ。私が生きていると自覚するのに十分な要因だと思えた。
とりあえず、周囲に何かないか探してみようと立ち上がったとき――。
カサリ、と落ち葉の踏み締められる音。
（あ、人がいるんだ。よかった）
そう安堵の息を零したのも束の間だった。
木陰から姿を現したのは、屈強な体格の数人の男たち。そして、そのいで立ちに私はまたも思考停止させてしまった。
「ほお。こんなところにいいモンが転がってんじゃねぇか」
「おぉ？　なかなかの上玉だなぁ、おい」
固まったままの私に構わず、男たちが側まで寄ってくる。
私を客観的に見ることができたなら、この時まさに「目が点になる」という表情を実践していただろう。
（すいません、あの、何かの撮影ですか？）
思わずそう訊きたくなったけれど、何とか堪えた。だけど、そう訊きたくなってしまうのも無理はない話だと思う。
何故なら、今目の前にいる男たちの格好が、アリエナイ。
頭には、揃いのバンダナ。何の獣かわからないけれど、毛皮でできたベスト。腰にはナイフが提げられて、まるでファンタジー系のゲームや物語に出てくる山賊みたいだ。
（集団コスプレ？　って、どうせやるなら、もうちょっとかっこい

いキャラをやればいいのに）
　呆然としながらもお節介なことを考えていると、その男たちの一人にぐいと腕を掴まれた。
「イタっ！」
「大人しくしてなよ、お嬢ちゃん。そうしたら、いいところに連れて行ってやるからよぉ」
　ニヤニヤと粘着質な笑みを浮かべて、値踏みするような視線を向けられる。それによって生じた生理的嫌悪感が、私に次の行動を起こさせた。
　右膝を太腿の高さまで持ち上げ、一気に踏み落とす。私の腕を掴んでいた男の、足の甲の上に。
　ちなみに私は、舞台上で履いていたハイヒールのままだ。
「うがぁっ！？」
　予想外に訪れた激痛により緩んだ男の手を振り払って、私は脱兎の如く走り出した。
「こんのガキっ！　待ちやがれっ！」
　待てと言われて素直に待つヤツなんているわけがない。私は男たちの声を完全無視して猛ダッシュした。
　走りながら履いていたハイヒールを脱ぐと、ついでに後ろに向かって投げつける。一つは外れたけれど、もう一つは男たちの一人の顔面に命中した。
　裸足になった所為で地面に落ちている小石や小枝が私の足を傷だらけにしたけれど、そんなことに構ってなどいられない。
　背後にはあの山賊みたいな男たちが、怒りに顔を朱に染めて追ってきているのだから。
　私はただひたすらに、少しでも前へと足を運んだ。
　けれど、数分走った頃、突然前方に人影が躍り出た。
（挟まれた！？）
　絶体絶命。四面楚歌。袋のネズミ。
　そんな言葉が、頭の中に幾つも浮かぶ。

（あと、こういう状況ってどういうんだっけ？　あ、あれだ）
人間とは、意外にも自分の危機に色んなことを考えることができるらしい。
（『まな板の上の鯉』。……ちょっと違うか）
いや、単に現実逃避しようとしているだけかもしれないけれど。
「大丈夫か！？」
「え？」
私を現実に引き戻したのは、目の前に現れた人物の思いもしない言葉だった。
よく見てみると、さっきの山賊系の男たちとはどう見ても違う系統の、けれどある意味同系統な姿。
白を基調に赤いラインの入った裾の長い上着。その下には黒のインナーを着ていて、ボトムは上着と同じ白。かっちりとした軍服のような格好で、腰には立派な剣を携えている。
騎士、という言葉がぴったりな気がした。
「おい？」
私が何も答えられないでいると、その人は訝しげな表情ですぐ傍までやってきた。と、それとほぼ同時に、
「見つけたぞ！　このガキ、ぶっ殺してやる！」
まさに血眼、と言わんばかり形相の男たちの声が響いた。特に私が足を踏みつけた男は、茹でダコのように真っ赤になっている。
死んでもいいと思っていたのは確かだけれど、こんな奴らに殺されるのだけは謹んで辞退させて頂きたかった。
「下がっていろ」
さっきの騎士――かどうかは定かではないけれど――が、鞘からすらりと剣を抜き、私を庇うように男たちの前に立つ。
逆上している男たちは、相手に構わず一斉に武器を構えて襲いかかった。
多勢に無勢。その人が危ないと思ったけれど、止める術もなくて、私は咄嗟に固く目を瞑った。

一瞬後、聞こえてきたのは幾つもの呻き声と人の倒れる音。
そっと目を開けると、先ほどより少し離れた場所に立つ騎士が、剣についた赤い滴を一振りして払い、鞘に納めているところだった。その周りには、山賊紛いの男たちが倒れ伏し、夥しいほどの赤が飛散している。
むっとむせ返るような、生臭い臭気が辺りに拡がった。
地面に拡がる赤が、未だに生々しさを残している私の記憶に、重なる。
（これは、何……？）
自ずとせり上がる嘔吐感。口元を押さえ、しゃがみ込んだ。
視界が、揺らぐ。
赤。紅。朱。
目の前に拡がる、アカ。
（これは、誰の……？）
目の前に、ありもしない光景が拡がる。
泥の混じった水溜りに、滲むように拡がっていく、アカ。
（これは……）
小刻みに震え出す、指先。肩。心。
『サクヤ』
懐かしい声は、もう聞けないのに。
『サクヤ』
それでもまだ、求めてしまう。
「……キョウ、ゴ……」
目蓋の裏に、愛しい笑顔。
――私は、再び闇に囚われた。
目が覚めたら、病院だった。

そんなオチなら良かったのに、現実は案外厳しいものらしい。
次に目覚めたのは、清潔そうな真っ白なシーツに包まれたベッドの上。
視線を巡らせれば、同じようなベッドがいくつか並んでいて、何となく病院のような雰囲気を醸し出している。けれど、その割に他の人がいる様子はなく、私が使っているベッド以外はすべて空いていた。
隣のベッドには助けてくれた騎士が腰掛け、少し気難しそうな表情で手にした書類を眺めている。傍らには他にも数枚の紙の束が置かれていたから、現在進行形で仕事中なのかもしれない。
「あ、目覚めたか」
私の観察するような視線に気づき、騎士は手の中の書類を束の上に戻した。表情は改められ、こちらを案じるような、申し訳なさそうな顔だった。
横になったままでは失礼な気がして、ゆっくりと身を起こす。
「無理しなくてもいいぞ」
「いえ、大丈夫です」
騎士が気遣いの言葉を寄越すけれど、実際にどこかを怪我したわけではなかったから、無理をしているつもりはなかった。少しだけ身体がふらついたけれど、それもそのうち治まるとわかっている。
「すまなかったな。普通はああいうのに免疫ないよな」
「……ありがとう、ございました」
申し訳なさそうに微笑む彼を見ないで、短く礼だけ返した。助けられたのは紛れもない事実だから。
けれど、本当に助けてもらえたことが幸運だったのか、いまだに判断できずにいた。
もしかしたら、あそこであのまま殺されていた方が、私は幸せだったのかもしれない。あの瞬間は死にたくないと思ったけれど、危険が通り過ぎれば「やっぱり」と簡単に考えを変えてしまえるなんて、何と自分勝手なんだろうと思う。

ただ、少しだけ気になることがあった。
それだけは、どうしても確かめられずにはいられない。
「一つ、訊いていいですか？」
「何だ？」
「ここは、どこですか？」
「ああ、安心していい。帝都の宮城内にある医務室だ」
「テイト？」
聞き慣れない言葉だった。思わず疑問の表情を浮かべた私に、騎士も訝しげに眉を顰める。
「サンベルティって言ったらわかるか？」
騎士自身はわかりやすく言い変えたのだろうけど、私にとってはますます知らない言葉だ。何となく地名のような気はするけれど、聞いたことは一度もない。
私は何も言葉を返せぬまま、もう一度まじまじと目の前の騎士の姿を観察した。
赤毛の髪に、ヘイゼルの瞳。顔立ちは彫りが深くて、欧州人かそのハーフの人っぽい。どう見ても日本人ではないだろう。
思い返せば、あの山賊のような男たちの中にも金髪や銀髪など日本人には有り得ないような髪色を持った者がいた。染めている可能性だってあるだろうけれど、それにしては自然な色に見えたのだ。
だったら、考えられる可能性は一つ。
ここは、『日本ではない』ということ。
「おまえ、どこから来たんだ？」
ただ見つめるばかりだった私に、騎士は警戒するような鋭い視線を向ける。
私は問われるまま、呆然とした思いで呟いた。
「『日本』」
「『ニホン』？」
今度は騎士の方がわからないといった表情をする番だった。
その顔を見ながら、私の中に限りなく確信に近い考えが浮かぶ。

大元を辿れば、劇場にいたはずの私が屋外にいたことからしておかしいのだ。私自身も、まず真っ先に驚いたことがそれだった。
そして、思ったのだ。
「もしかして、天国？」と。
もちろん、天国なわけがない。まず何より、私は自分が死んでも天国に行けるとは思えないから。
けれど、明らかに『日本』でもない。いや、私の知っているどの国でもないんじゃないだろうか。
「どうしてあの森にいたんだ？」
「知らない。気づいたら、あそこにいて……」
更に重ねられた騎士の問いに答える声が、次第に掠れていった。
どうしてなんて、こっちが訊きたいくらいだ。
私は、舞台の上にいた。日本の、とある小劇場の、その舞台上に。
それがどうして気づいたら全く知らない場所なのか。
（こんなの、物語の中だけじゃないの？）
そう、私が今までに読んだお話の中にはいくつもあった。
ウサギを追いかけていて知らない世界に迷い込んだ女の子の話。
古びた本を開いたら本の中の世界に吸いこまれた女の子の話。
ある日突然、知らない男の人が迎えに来て、奇妙な世界に連れて行かれた女の子の話。
でもそれはあくまでも『物語』であって、現実には起こり得ないはずだった。
けれど、ここは、私がいた世界とは違う。
目の前の騎士も、あの山賊のような男たちの姿も、それなら全て説明がつく。ここが違う世界ならば、コスプレなんかじゃなくて彼らの方が普通なのだ。
むしろ、異質なのは私の方で――。
そこまで思い至って、あることに私は気づいた。
気づいて、しまった。
途端に、どうしようもなく笑いがこみ上げてくる。

「……ふ、ふふふ……あはははは……」
いきなり笑い出した私に、騎士が怪訝な視線を向ける。それでも私は笑い続けた。
何て馬鹿馬鹿しい喜劇だろうか。これは、私の『望み』が叶えられただけ。
『鏡吾のいないこの世界になんて、生きてたって意味がない』
奈落へと落下しながら、そう思ったのは、間違いなく私自身だった。
けれど、
「どっちにしろ、いないじゃない……」
笑い声が、いびつに歪んだ。
『日本』にいたって、鏡吾はいない。
けれど、今いるこの世界にだって、鏡吾がいるはずないのだ。
どこに行ったって、鏡吾はもういない。
それは、不愉快なほど確かな事実。
「おい」
項垂れる私の肩を掴み、覗き込むように騎士が窺う。
けれど、私には目の前の騎士の顔など見えていなかった。何も、見えなかった。
「ここにだって、鏡吾はいない……」
声に出して呟けば、その言葉が刃となって自分自身を貫く。
どうしようもない、覆せない現実を前に、私にできることなんてもう何一つなかった。
「……馬鹿みたい。大人しく、死んでればよかったのに」
あの、奈落に落ちたその時に。
もしくは、あの男たちに捕まって、そのままに。
きっとそれが一番楽だった。
「おまえ、それはどういう意味だ？」
肩を掴んでいた騎士の手の力が、強くなる。その声音にも、強い非難の色があった。

何が気に障ったのか、彼は怒っているようだったけれど、そんなことは私にとってはどうでもいい。訊かれるままに淡々と答えた。
「そのままじゃない。あのままアイツらに殺されてればよかったのよ。鏡吾との『約束』だって私は守り切った。だったら、もう生きてたって何の意味も――」
乾いた音と頬に走る痛みに邪魔をされ、その先を言い切ることはできなかった。
殴られたのだと気づいたのはその数秒後。
「ふざけんな。何があったかは知らねぇけど、死にたくなくても死んでくヤツは山ほどいるんだ。死ねば良かったなんて簡単に口にするな」
激しい口調ではないけれど、騎士のその言葉には明らかな怒りと責める響きがあった。
彼の言っていることは正論だと思う。
けれど、私はその言い草に理不尽さを感じた。顔を上げ、キッと彼を睨みつける。
「じゃあ、アンタはどうなの？　あの男たちを簡単に殺したじゃない」
私の言葉に、騎士の表情が凍りつく。
「確かにアイツらは私を攫って売り飛ばそうとしてた。それがこの国で罪になるのかどうか知らないけど、もし罪になったとしても殺していい理由になるの？　罪を犯した人間は、殺されて当然なの？　だったら……！」
そこまで言って、泣きながら私を罵った人の顔が思い浮かぶ。
きっと、私と変わらない、いや、私以上に鏡吾を愛していた人の泣き叫ぶ顔。
『人殺し！　貴女がいなければ、鏡吾は死なずに済んだのよ！』
その言葉に、私は何一つ反論できなかった。
鏡吾が、私を庇ったが為に命を落としたことは本当だから。
私が、鏡吾を殺したのだ。

「だったら、私こそ殺すべきじゃないっ」
涙が、堪え切れずに零れ落ちた。今までずっと我慢してきたのに。
そして、涙とともにとめどなく流れ出てくるのは、後悔の念。
何故あの時、私は鏡吾を守ることができなかったのか。
何故あの日、二人で出掛けるのをやめなかったのか。
何故……。
そんな、今更どうしようもない思いばかりが、溢れ返る。
潤んだ視界で、騎士がどんな顔をしているのかはわからなかったけれど、何かが動いたのは見えた。
その直後、ふわりと優しい腕が背中にまわされる。そのまま抱き寄せられ、武骨な手が慰めるように頭を撫でた。
「そんなに、自分を責めるな」
まるで何があったのかをすべて見通しているかのような、慈しみに満ちた声だった。先ほど私を叱りつけたような厳しさはそこにはない。ただただ、どこまでも穏やかで慈愛を感じる声。
それに触発されるように、抑え切れなくなった嗚咽が零れる。
そう。私はずっと、許されたかったのだ。
鏡吾の家族でも、劇団の仲間でもなく、私は『私自身』から許されたかった。
誰よりも、『私』が『私』を許せなかったから。
けれど、何故かこの騎士の声で、私を絡め取っていた自責の鎖がするりと外れてしまった。理由などわからないけれど、「もう我慢しなくていい」とそう言ってもらえた気がした。
そうして私は、しばらくそのまま彼の腕の中で泣き続けたのだった。

ひとしきり泣いた後、私が落ち着いたのを見計らって、騎士は私を抱き締める腕をそっと解いた。そして、涙の痕の残る左頬に指先

で触れる。
「悪かったな、殴ったりして」
返す言葉もなく、私はただ無言で首を振った。
殴られたのは確かだけど、その後にかなりひどい暴言を吐いた気がする。この人は私を助ける為に剣を振るっただけなのに、あんな風に詰るのは筋違いだし、ただの八つ当たりでしかないと今更ながらに思った。
「でも、死んだって何にもならないだろ。それどころか、二度とおまえの大切な人に会えなくなるだけだ」
「……どういう意味？」
騎士の言う言葉の意味が、よく理解できなかった。
大切な人になら、どのみちもう二度と会えない。鏡吾に会えるとしたら、それは私が死んだ時だろう。
いや、たとえ死んだとしても、死後の世界が天国と地獄のように分かれているならば、会えない可能性のほうがずっと高い。多分、私は鏡吾と同じ場所には行けないから。
「ああ、この国の者じゃないなら知らないか。聖典には《自らを滅する者、彷徨し、辿り着くは『無』なり》って言葉がある」
聖典ということは、この国の宗教の教えの一つだろう。目の前の騎士が聖典などというものを引っ張り出してくるとは思いもしなかったが、見かけによらず信心深いらしい。
言葉の意味は、何となくわかる。わかるけれど、理解できるわけではなかった。
「そんな風に、自分から死を呼び込むようなことをしたら、おまえは生まれ変われない」
真剣な表情で、騎士が訴える。
けれど、私は生まれ変わりなんて信じてない。神様なんているわけないし、願いを聞き入れてくれたことだってないじゃないかと思う。
そんな冷めた考えが頭の中を占めていた。

「それほど大切な相手なら、生まれ変わったそいつともう一度一緒になりたいだろう？」
なおも真摯に投げかけられる騎士の言葉。そして、その瞳を見た瞬間、思わず息を呑んだ。
赤みを帯びた、薄褐色の瞳。
強く、まっすぐで、曇りのないそれに、不思議な引力があるかのように惹きつけられる。
「ずっと一緒にいたいくらい、そいつのことを好きなんだろう？」
重ねて確かめるような声は、脳に直接届くように身体に染み込んでくる。
気付けば、その瞳と声に促されて、私はこくりと小さく頷いていた。
たとえ神を信じていなくても、鏡吾と一緒にいたい気持ちは本当だ。純粋に、一途に、私は鏡吾とともに生きていきたいと望んできたのだ。
神も生まれ変わりも何一つ信じてはいないけれど、何故か信じてみてもいいんじゃないかという気持ちにさせられてしまっていた。
「だったら、生きろ」
駄目押しのようにそう告げる声に、私はもう一度頷く。それを見て、騎士は満足そうにニッと笑った。
「名前、聞いてなかったな。俺はキース。一応この国の騎士だ。おまえは？」
「サクヤ」
「サクヤ、か。変わった名前だな」
キースに言われて、つい苦笑を洩らしてしまった。日本でもあまりありふれた名前ではないけれど、やっぱりこちらでも珍しいらしい。
「よく言われる」
「でも、響きは綺麗だ。おまえによく似合ってるよ」
屈託なくキースが笑う。ほんの少し前まで厳しい表情をしていた

のが嘘のような優しい笑顔に、自然と私までホッとさせられた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1323ba/

夢のあとさき

2012年1月6日10時48分発行